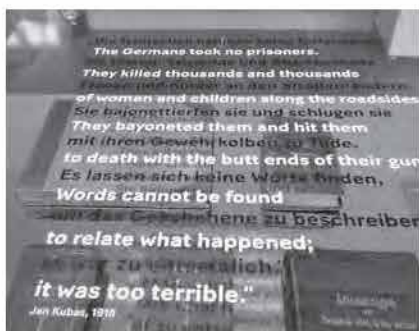


# 脱植民地化の試み 「言葉にならないこと——大声の沈黙」展

梶村道子 (ベルリン・女の会)

7月の暑い日、ドレスデン民族博物館で開催中の「言葉にならないこと——大声の沈黙」展に行ってきました。同展にはベルリンからコリア協議会が参加し、フィリピンの「慰安婦」被害者レメディオス・フェリアスさんのキルト作品「私の戦争体験」(『wam だより』vol.42、45)も展示されています。そのウェブサイトには、「語られないまま世代を超えて共同体のトラウマとなった、戦争・ジェノサイド・迫害・追放などの極端な暴力体験の記憶は、芸術を通して発話されるか、その可能性を探る」とあります。前時代的響きの「民族学」博物館でこのテーマがどう表現されるのか、日本軍性暴力の問題はどう位置付けられるのか。興味をそそられました。

上階の展示室には博物館の収集品が並んでいます。例えばショーケースの中の数冊の古書。これらは1904



古書が並ぶショーケース上の独・英語文。「ドイツ人は何千人もの女性や子どもを殺害した。銃剣で刺し、銃床で殴った。起こった事は、言葉で表わせないほど酷いものだった」。被害者とその後継世代への配慮から、残虐な写真ページは見せない。(写真はすべて筆者提供)

～1908年にドイツが植民地支配下のナミビアで行った先住民ヘレロ人とナマ人の虐殺の証言です。あるいは、居住権剥奪の長い歴史の末にようやくオーストラリア先住民コミュニティに返還されることになった盾と弓矢。布製の額に収まった美しい市街の写真は、オスマン帝国に虐殺されたアルメニア人が失った故郷の記録です。その奥の部屋にショアの証人7人の写真が並びます。これらの展示品と対話するように、それぞれのテーマを扱ったアート作品が随所に置かれ、壁や床には詩が投影されています。「言語と共同体が脅威に晒されたところでは、文学こそが可能性の空間を開く」。これがこの展示コンセプトの縦糸です。



ショアの証人7人のポートレートと床に映された詩の言葉。

続く階下の展示室では、ハンカチを繋いだ「追悼の巻物」が部屋いっぱいに拡がります。ボスニアの女性たちは、

1990年代初頭の戦争で失った家族の名前を一枚のハンカチに刺繍する共同作業を通して、喪失を表現しました。その部屋



ボスニアの女性たちの手になる「追悼の巻物」。

に向かいあうのが、レメディオスさんのキルト、矢嶋幸さんによるナヌムの家のハルモニたちのポートレート、姜徳景さんの「責任者を処罰せよ」と「平和の碑」のレプリカの展示室です。アジア各国の9人のサバイバーのプラカードやバナーが、毎年8月14日のデモを再現しています。上階の壁や床にあった詩の言葉は階下の空間にはありません。その必要がないのです。この二つの展示は、被害者や共同体が筆舌に尽くし難い体験の末、自ら言葉を見出したケースだからです。観終えて中庭に出ると、ブロンズの「平和の碑」が建っていました。

「民族学」博物館に一見不似合いなこの「言葉にならないこと——大声の沈黙」展は、世界で進む脱植民地化の議論の中で博物館の在り方を探る一つの試みです。ドレスデン民族博物館のウェブサイトは、「植民地主義の過去とつながる民族博物館の歴史はアンビバレントで、批判的省察を要する。そこから責任が生じる。収集品へのエンパシーが私たちが動かす力で、収集品の由来する社会との対話は重要な前提だ」と述べています。ザクセン州立ドレスデン美術コレクションに属する民族博物館の歴史は古く、アフリカ関係の所蔵品の多くがドイツの旧植民地や近隣の中央アフリカ一帯からの収奪品です。数年来収集品の出処と収集経緯の解明に力を入れてきた同館は、そこには植民地主義による分断と不平等の歴史、構造的暴力、レイシズムが顕著だと書いています。研究結果は博物館のウェブサイトで公表され、今年の3月には、収奪品や遺骨などの返還プロジェクトを紹介する「脱植民地化サイト」も設けられました。

ホロコーストの記憶を一義的に「想起する文化」としてきたドイツにも、今、地理的・時系列的により拡がりをもつ植民地支配の歴史への視点が求められています。ホロコーストの記憶を堅持しつつ、植民地犯罪の記憶を共有していくこと。今回の展示は、ドイツの社会に課せられたこの多方向的記憶の実践への果敢な一歩だと言えます。

\*同展のウェブサイト：<https://japanisches-palais.skd.museum/ausstellungen/sprachlosigkeit-das-laute-verstummen/>